

Title	唐代漠南における突厥可汗國の復興と展開
Author(s)	鈴木, 宏節
Citation	東洋史研究 (2011), 70(1): 35-66
Issue Date	2011-06
URL	http://dx.doi.org/10.14989/188955
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

唐代漠南における突厥可汗國の復興と展開

鈴木宏節

序論

第一章 黒沙の地理比定

(一) 突厥碑文のカラリクム

(二) 漢籍史料の黒沙

(三) 陰山と黒沙

第二章 漠南における突厥可汗國の展開

(一) 突厥可汗國復興後の碑文記事

(二) 默啜可汗の「山東」攻撃

第三章 突厥の黒沙領有とその意義

結語

序論

唐の永淳元年（西暦六八二年）、三度の蜂起を経て、古代トルコ系遊牧國家である突厥^{カガシ}可汗國が復興した。突厥遺民を糾合した王族阿史那氏の骨咄祿^{クトルルク}が可汗に推戴され、唐の羈縻支配から離脱したのである。突厥第二可汗國の誕生である。⁽¹⁾とくに、貞觀四（六三〇）年の突厥第一可汗國崩壊から半世紀の歲月が経過していた。この半世紀あまりの間、唐は自らの

可汗を失った突厥遺民に對して「幽州より靈州に至る」範圍、すなわち東西は現在の北京周邊から銀川・靈武周邊にいたる地域、南北はオルドスや黄河大屈曲部から陰山山脈にわたる地域に羈縻州を設置して彼らの統制をはかった。⁽²⁾その後、麟德元（六六四）年には陰山山脈の南に單于都護府を設置し、おもに黄河以北の地において突厥の騎兵軍團の間接統治を行った。つまり、突厥復興の舞臺はゴビ沙漠の南、いわゆる漠南にあったのである。

さて、このように突厥が羈縻支配を受けいれて散居していた漠南の「農牧接壤地帯」に、近年、注目が集まっている。この概念は地理上のものであり、農業と牧畜業が混淆する地域を指している。具體的に示せば、現在の内蒙古自治區から河北省北部、山西省北部、陝西省北部、寧夏、甘肅にいたる一帯であり、牧畜業に適する乾燥した草原が廣がると同時に、水資源を確保できる可耕地も内包している。古來、匈奴や鮮卑にはじまり、突厥や回鶻^{ウイグル}、契丹やモンゴル諸族など様々な集團が活躍した一方、農耕民や都市民が生活の基盤を置いていた。

この農牧接壤地帯のアイデアは、當初、ラティモア氏が、中國北部・東北部の東西に廣がる邊境ベルト地帯をとりあげ、そこが中國史において征服王朝に成長する諸集團を蓄積する“Reservoir”「リザーヴァー（貯水池）」の役割を果たしていたと看破したことに始まる[Lattimore 1932]。その後、その見解に着目した石見清裕氏が、中國前近代史における中國王朝と遊牧國家との中間地帯の重要性を改めて喚起し、「（中國北邊）ベルト狀地帯」と呼稱して、再評價されるようになった[石見一九九九、二九六―二九八頁]。それに前後して、妹尾達彦氏も中國史の文明史的展開を論ずるなかで、ユーラシア大陸の北緯三十度から四十度に帶狀に廣がる「農業・遊牧境界地帯」の特徴とその重要性を指摘する。つまり、その境界地帯は、定住農耕と遊牧・牧畜・狩獵などの異なる生業に立脚するものどうしが接觸し混淆して、それぞれの生産物が交換される場所であり、高度な商業が榮えると同時に、都市あるいは政治權力を發生させる場所であったという[妹尾二〇〇一、三〇一―三四頁]⁽⁴⁾。そして、そのような研究動向を受け、中央ユーラシア史の立場から當該地域の再定義を試みたのが、森安孝夫氏であった。森安氏はそれを「農牧接壤地帯」と命名し、そこが中國史のダイナミズムを生み出してきた中

核部と評價した上、中國史の枠組みを超えたユーラシア東部全域を対象とする歴史像を再構築できると主張するにいたったのである〔森安二〇〇七、五九一―六二頁〕。

以上のような議論が展開するなかで、おもに東アジア史・隋唐五代史の文脈から、とりわけ唐王朝と関わりが深かったイラン系のソグド人についての研究が陸續と生み出されている。⁽⁵⁾ なかんずく唐代における当該地域に關しては、遊牧文化を身につけた「ソグド系突厥」の存在が議論されるようになった〔森安二〇〇二、一一八頁、注二〕。しかし、森安氏がこれまでの議論の中で唯一、中央ユーラシア史の視點から農牧接壤地帯を分析する先鞭をつけているにもかかわらず、当該地域における遊牧諸族そのものの動向に主軸を据えた考察、あるいは彼らの史料とその讀解に基づいた研究はほぼ皆無であつたと言わざるを得ない。⁽⁶⁾

そこで本稿は、遊牧國家たる突厥可汗國がこの農牧接壤地帯といかに關わつていたのかを具體的に考察するため、漢籍史料で「黑沙」と記録される突厥復興の根據地に着目する。なんとすれば、この「黑沙」とは、突厥碑文に「黒い沙漠」と記載されており、遊牧民が残した一次史料から検討を許してくれるからである。本稿は、中央ユーラシアの遊牧民族史あるいは古代トルコ文獻學の視點から史料批判を行うのであり、それを通じて、漠南における突厥可汗國の展開を追跡するとともに、その歴史的意義を明らかにするものである。

第一章 黑沙の地理比定

(一) 突厥碑文のキャラクター

突厥第二可汗國の八世紀前半、モンゴル高原には突厥文字（テュルク・ルーン文字）・古代トルコ語の碑文が誕生した。この史料群には、突厥可汗國の據點となつた地名が記載されており、なかでも「オテュケン山」⁽⁷⁾はモンゴル高原における

第二可汗國の中心據點として斯學に名高い。一方、「黒い沙漠」^{カラシクム}もまた、その勃興期の據點として早くから注目を集めてきた。初代可汗に即位した骨咄祿（在位：六八二―六九一年）以來、默啜可汗（骨咄祿の弟、在位：六九一―七一六年）、毗伽可汗（骨咄祿の子、在位：七一六―七三四年）と、三代の可汗に仕えた武人宰相である噉欲谷^{トニユク}（阿史德元珍）に獻げられた碑文には、以下のように記されている。

〔史料 A〕 トニユクク碑文⁽⁸⁾・七行目 〔第一碑文・西面七行目〕⁽⁹⁾

birlä : eltäriš qayan : bolaym : beryä : tavyačty : öjrä q'tianiy : yirya oyuzuy : üküš ök ölürti : bilgäsi : čavışi :
bän ök ärtim : čoyay quzin : qara qunuy : olurur : ärtimiz :⁽¹⁰⁾

（ビルゲ^ビトニユククこと裴羅莫賀達干^{ボイロバガタルカン}）とともに、我^{われ}（骨咄祿）は頡^エ跌^ル利^テ施^リ可汗になろう！」（と彼は言った。そして）南に唐^{タフガチ}を、東に契丹を、北に（トクズ^二）オグズを、非常に多くを彼は殺した。彼の參謀・軍事司令官は、私（トニユクク）、まさに私であつた。チヨガイ^二クズを、カラ^二クムを我らは占據していた。

唐の羈縻支配に對抗して蜂起した初代可汗の發言とトニユククの活躍が記述されており、彼ら突厥遺民の根據地としてチヨガイ^二クズ（本章の第三節で検討する）とカラ^二クムという地名を読み取ることができ。

このほか、カラ^二クムの在證例は、ウイグル可汗國第二代の葛勒可汗（在位：七四七―七五九年）こと磨延啜に獻げられた突厥文字碑文にも見られる。

〔史料 B〕 シネウス碑文・北面八行目⁽¹¹⁾

ertim qara : qum : ašmīš : köğärdä : kömür tayda : yar ögüzä : üč tuyluy türük bodunga

////////////////////////////////////

（……）に私は到着した。（既に）カラ^二クムを渡ってしまっており、キョゲルやキョミウル^二ターグ（炭山）やヤール河に（いる）三纛突厥の民に對して、

////////////////////////////////////

七四〇年代初頭、回鶻・拔悉蜜・葛邏祿の三部族連合のクーデターに遭い、モンゴル高原・オルホン河上流域の本據地を追われた突厥は、漠南方面にも落ち延びていた。その際、三纛突厥と呼ばれた突厥の殘黨がカラ・クムを通過したと見られ、引用箇所は、碑文の主人公である磨延啜がその殘黨を追撃したという場面である。

以上の二碑文の用例から、古代トルコ語の地名としてカラ・クムが確認され、とりわけ突厥第二可汗國の興亡に深く関わった土地であったことが理解されよう。

(二) 漢籍史料の黑沙

漢籍史料中には、前節で示した古代トルコ語の「黒い沙漠」に對應する「黑沙」という地名が散見される。まずは關連史料を列舉しておきたい。

〔史料C〕『舊唐書』卷五・高宗本紀下「中華書局標點本、一一〇頁」

「永淳元（六八二）年」突厥の餘黨阿史那骨篤祿等は、殘衆を招合して、黑沙城に據り、并州の北境に入寇す。

〔史料D〕『通典』卷一九八・邊防一四・突厥中「中華書局標點本、五四三五頁」

その年（聖曆元年＝六九八年）、武太后は魏王の武承嗣の男、淮陽王の延秀に令して、その（默啜の）女を就納して妃爲らしめんとす。右豹韜衛大將軍の閻知微を遣わし春官尙書を攝り、大いに金帛を齎し、虜廷に送赴せしむ。行きて黑沙南庭に至るに、默啜は知微等に謂いて曰く、……《後略》

骨咄祿は唐に反旗を翻した際に「黑沙城」に本據を置き〔史料C〕、二代目可汗の默啜は聖曆元年當時、漠北はモンゴル高原・オテウケン地方の牙庭オルドとは別に、「黑沙」に南の牙庭を置いていたという〔史料D〕。

突厥碑文研究の草創期において、ヒルト氏はこれらの地名がいずれも「黑沙」を冠していることから同一地點とみなし

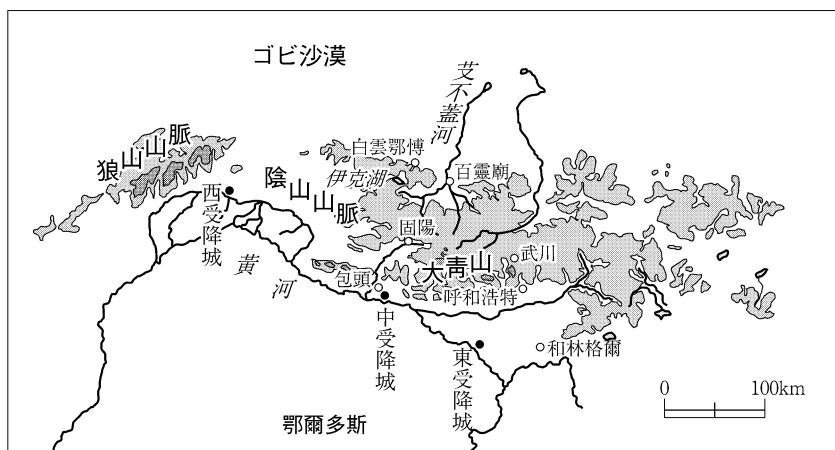


圖1 陰山山脈要圖

地勢と現代の地名については『中華人民共和國地圖集』（北京、中國地圖出版社、1996年）を利用した。

た上、突厥碑文で同義であるカラ・クムと併せ、ともに戈壁沙漠を指すと推測した [Hirth 1899, pp. 31-33]。

これに對して、岩佐精一郎氏は漢籍史料の精緻な分析から、黒沙すなわちカラ・クムが突厥遺民の間接支配を擔っていた單于都護府方面に位置すると比定した。すなわち黒沙とは、現在の内蒙古・呼和浩特市の北方に廣がる平野を指し、漠南の「陰山山口の谷原」あるいは「歸化城^{現フホト市}北方の陰山地方」に存したと考證したのである [岩佐一九三六、一一四頁]。

ここに突厥碑文のカラ・クムが漢籍の黒沙に對應するものであり、漠南の陰山山脈に所在したという點も解明されたが、その所在地を具體的に究明しようという試みは以後も繼續されてきた。

唐代の交通路復元に専心された嚴耕望氏は、單于都護府周邊の考證に際して、「又た東のかた六十里にして賀人山に至る。山西の磧口に詰特健泊有り」という『新唐書』卷四三下・地理七下所引の賈耽の記事に注目した [中華書局標點本、一一四八頁]。そこで中華人民共和國地圖集や世界航空地形圖 (Operational Navigation Chart) を援用し、この「詰特健泊」を内蒙古の烏拉特後旗・東公旗王府にある伊克湖^{イフネール}にあてた。その上で、次に掲げる [史料E1] の「黒沙磧口」や [史料E2・3・4] にも見られる「磧口」とい

う地名をゴビ沙漠の入口であるとし、[磧口]と「黑沙城」をこの伊克湖畔に推定したのである[嚴耕望一九八五、二七七・二七九―二八〇頁・圖六]。

〔史料E〕『元和郡縣圖志』卷四

E1..單于大都護府「八到」[中華書局標點本、一〇八頁]

西南のかた東受降城に至ること二百二十里。北のかた黑沙磧口に至ること七百里。

E2..東受降城[中華書局標點本、一一五頁]

東北のかた單于都護府に至ること一百二十里。東北ママ（校勘記は南に作る）のかた朔州に至ること四百里。西のかた中受降城に至ること三百里。北のかた磧口に至ること八百里。

E3..中受降城[中華書局標點本、一一五頁]

東のかた東受降城に至ること三百里。西北のかた天德軍に至ること二百里。南のかた麟州に至ること四百里。北のかた磧口に至ること五百里。

E4..西受降城[中華書局標點本、一一六頁]

北のかた磧口に至ること三百里。磧口の西回鶻ウイグルの衙帳に至ること一千五百里。

一方、嚴氏とは別に、芮傳明氏も「黑沙磧口」と「磧口」とを等しく突厥碑文のカラキウムであるとみなし、〔史料E〕に記載された單于都護府、東受降城、中受降城、西受降城から、黑沙磧口／磧口までの距離をそれぞれ同心圓狀にトレースし、それらが交叉する地點を求めた。その結果、芮氏は、現在の内蒙古の包頭市の北方、その直轄區である白雲鄂博バヤンホボの周邊ないそこから西北百―二百キロメートルまでの範圍に黑沙カラキウムが所在すると推測したのである[芮傳明一九九八、一一一―一五・二五頁]。

(三) 陰山と黒沙

そこで、嚴耕望・芮傳明兩氏による推測の是非を判定するため〔史料A〕に立ち返り、カラ＝クムと併記されていたチヨガイ＝クズについて検討したい。古代トルコ語の *čogay* 「チヨガイ」について、トムセン氏はチャガタイ＝トルコ語で確認される *čoya* 「影、陰」という單語と派生關係にある可能性を示し、同時代に成立した、毗伽可汗の弟こと闕特勤に獻げられた碑文（闕特勤碑文・南面六行目）に刻まれている *čoyay yis* 「チヨガイ＝ユシユ」という地名を「暗い山林、影の山」と譯出していた〔Thomsen 1896, pp. 117, 169, n. 73〕。これに注目した岩佐氏は、チヨガイ＝ユシユこそが「陰山」そのものであると看破し、チヨガイ＝クズを「陰山中の突厥本據の要衝」に比定したのであった。⁽¹³⁾その後、ツエグレーディ氏もトムセン氏の見解を引用して、チヨガイ＝ユシユが「陰山」であるという結論に達し、チヨガイ＝クズを「陰山の北側」として、カラ＝クムを陰山山脈の北側に所在する「黒い沙漠」であるとみた〔Czeledy 1962, pp. 57-58〕。

それ故、もう一度、チヨガイ＝クズの「陰山山脈の北斜面」という原義に立ち返り、陰山山脈北斜面の地理條件に着目してみたい。現在のモンゴル國南部から廣がるゴビ沙漠の土壤はおおむね灰色か黄色の沙漠性土壤である一方、陰山山脈の北麓には暗色（栗色）あるいは黒色の土壤が廣がる地域があり、レア＝アース鑛床として脚光を浴びた白雲鄂博はちょうどこの兩者の境界に位置している。一般には中國東北地方に肥沃な黒色土壤、黒土（チエルノーゼム）が廣がっていると認知されているが、陰山山脈の内部にも腐植層が薄いとは言え、栗色土の土壤が分布している〔任美鏐一九八六、二三二頁〕。例えば、艾不蓋河や希拉穆仁河の上流域以南に位置する陰山北斜面の山間盆地は、チエルノーゼムによる黒色土壤地域に含まれている。⁽¹⁴⁾それ故、その一帯が北方に廣がるゴビ沙漠と對比されて「黒い沙漠」と稱された蓋然性は高い。⁽¹⁵⁾

ただし、史料上では沙漠と稱せられてはいるが、そこが全く不毛の地ではなかったことにも留意したい。現に發達している山岳草原の存在や「任美鏐一九八六、二二四―二二八頁」、さらにはかつて發達していたと推測される山岳森林ステップ

の存在「吉田一九八〇、五二―五三頁」を考慮すれば、唐代にも陰山山脈の北斜面に遊牧民の生活を支える草原が存在したことは間違いない。その點、嚴氏が推定した伊克湖畔は水資源を確保できることから肯首できるとして、芮氏の最大推測範圍である、白雲鄂博から西北に百―二百キロメートルも離れた一帯はゴビ沙漠にあたるのであり、突厥が勢力を擴大できたとは考え難い。

それでは、陰山山脈と突厥の關係を示唆する考古遺跡に着目してみたい。すなわち、一九八〇年代前半、內蒙古自治區の達爾罕茂明安聯合旗（以下、達茂旗とする）で考古學調査を行った蓋山林氏によって公開された、百靈廟鎮を中心に分布する古墓群である。その所在は、(A)百靈廟鎮の東北五十キロメートル、查干敖包蘇木の「可可哈達」、(B)百靈廟鎮の西方、達茂旗と烏拉特中旗との境界にある哈尼河の東岸の「哈達特羅蓋」と「保羅忽洞」、(C)同じく百靈廟鎮の西方、白音朱日和蘇木から南一キロメートルの「忽笑」、の三箇所に集中しており、以下の二様式に分類されるという「蓋山林一九九二、七五一―七五五頁」。

第一類型…四方を板石で圍んだ正方形墓。一邊は一・四―四メートル程の規模。土砂や石塊の堆積がなく、ほぼ平坦。正方形墓が南北に複數列ぶ遺跡もある。南面あるいは東面に石製人物像「石人」が立てられた遺跡がある。

第二類型…大小の石を四周に配した方形墓。東西五メートル×南北十メートル程の規模。土砂や石塊による高さ〇・三―一メートル程の堆積がある。東邊に立石を伴う。

蓋山林氏は、モンゴル高原あるいは內陸アジアで古代トルコ時代に成立した石圍い遺跡との共通點を挙げ、これらの古墓群を突厥時代に屬するものと推定した「蓋山林一九九二、七五七―七六〇頁」。なるほど、方形の石圍い遺跡やそれが並列するという様式は、モンゴルをはじめとするモンゴル西部やアルタイ山中など中央ユーラシア各地に所在する古代トルコ時代の遺跡と共通している「蓋山林一九九九、二八一―二八四・二九五―二九七頁」。また、これらの古墓群に伴う石人は突厥の勢力範圍における埋葬遺跡に特有の遺物であるから「蓋山林一九九九、二九七―三〇七頁」、その時代觀は支持されよう。特

にアルタイ山脈以東で石人を伴う遺跡の發生が七世紀半ば以降であり、ウイグル時代には石人が確認できないという點を考慮すれば、これらの古墓群が第二可汗國に由來すると判定して大過ないであろう。

従って、嚴耕望氏の推測はほぼ正鵠を射ていたと言える。例えば、上掲した(C)の忽笑遺跡は現在の明安鎮に所在しており、嚴耕望氏が「磧口」と「黑沙城」を比定した伊克湖から北方約十五キロメートルに立地しているからである。なお、その遺跡は白雲鄂博からは西方約三十キロメートルの距離に所在しており、芮氏が白雲鄂博を「黑沙」推定の中心に据えた點は評價できるだろう。

以上、突厥第二可汗國に由來すべき古墓群の所在地を勘案して、本章では、カフカス黑沙が、現在の達爾罕茂明安聯合旗を流れる艾不蓋河の中上流域、百靈廟鎮を中心とした半徑約五十キロメートルの範圍にあったと結論したい。蓋山林氏は當該遺跡の發見に接して「内蒙古北部草原、是突厥人最初の起源地之一」と總括しているが「蓋山林一九九一、七六〇頁」⁽¹⁷⁾、突厥可汗國の展開に即せば、關連遺跡が残された一帯こそが第二可汗國の搖籃の地たる「カラキクム黒い沙漠」⁽¹⁸⁾なのであり、骨咄祿が遺民を糾合した黑沙城や、默啜可汗が本據地とした黑沙南庭の有力な候補地である。

第二章 漠南における突厥可汗國の展開

(一) 突厥可汗國復興後の碑文記事

本章では突厥可汗國と農牧接壤地帯との關わりを検討するため、先ずは漠南における突厥の活動を記録した碑文記事を特定したい。突厥碑文のなかでもキョルテギン闕特勤碑文(七三二年建立)やビルゲイカガン毗伽可汗碑文(七三五年建立)は、モンゴル高原の本據地「オテケン山」の保持を贊美する記述が際だっており「護一九七六、一〇四—一〇六頁」、漠南における突厥の活動については寡黙である。しかし、トニユクク碑文には、默啜可汗時代の軍事遠征について少なからざる記事が残されているため、

黒沙に本據地が置かれていた時期における彼らの動向を読み取ることは可能である。

〔史料 F〕 トニユクク碑文・十八―十九行目 〔第一碑文・東面一―二行目〕

(18) 《前略》 *türük bodun : qılınçalı : türük qayan : olurçalı : şantun balıqca : taluy ögüzkä : tğemiş yoc ärmiş : qayanına : ötünüp : sülärdin*

「突厥の民が成長するために、突厥の可汗が君臨するために、山東の城郭に、海（のうとき）河に到達したことはなかったそうです」と、私の可汗（默啜）に申し上げて、私（トニユクク）は出軍させた。

(19) *şantun balıqca taluy ögüzkä : tğürtin : üç otuz balıq : sidi : 《後略》*

山東の「城郭に」海（のうとき）河に私は（突厥軍を）到達せしめた。二十三（箇所）の城郭を（突厥軍が）破壊した。

記事内容を正確に把握するため、先ずは傍線部で示した部分について検証を行いたい（次節で波線部分を考察する）。

古代トルコ語の文法上、動詞に附屬する接尾辭 *-gali/-yalı* については、①「……するために」という目的節を作る不定詞／連用形用法と、②「……してから、して以来」を含意する連用形用法の二つが指摘されており [Gabain 1974, pp. 123-124; Tekin 1968, pp. 184-185; Erdal 2004, pp. 488-490, 479-480]、研究史上、〔史料 F〕の *qılınçalı* と *olurçalı* における *-yalı* の解釋も二説に分かれている。概観すれば、②の「……して以来」という用法で解釋する見解が優勢で、⁽²¹⁾ 突厥文字碑文の専門文法書を著したテキン氏も、古代トルコ語の文法書を編んだエルダル氏もその立場を堅持している [Tekin 1968, pp. 184-185, 285; Tekin 2000, pp. 177-178; Erdal 2004, p. 479]。

しかし、突厥碑文における接尾辭 *-gali/-yalı* の在證例を總覽してみれば、本箇所以外の用例はトニユクク碑文であれ、それ以外の碑文であれ、すべて①の目的用法で解釋すべきことが判明するのであり、むしろ②の用法では文脈を通じさせることができない。それは上掲の各文法書でも認めるところである。そもそも、エルダル氏が挙げる用例はいずれも古代

トルコ文獻上、時代の下ったウイグル語の佛教佛典で確認される限定的なもので、突厥時代の用例として挙げているのは唯一當該箇所だけである [Erđal 2004, pp. 479-480]。しかもそのウイグル佛典の用例においてさえ、主節に動詞 *bol-* が現れる限定的な文脈のみで②の用法が適應されるという [Erđal 2004, p. 479]。古代トルコ語文法の基礎を構築されたガバイン氏も、かような特殊性を注記していたのであり [Gabain 1974, pp. 123-124]、當初の諸研究では①の目的用法で譯出されていたのである。⁽²³⁾

以上の文獻學的根據を踏まえれば、「史料F」における接尾辭 *-ai-* を②の用法で解釋すべき必然性はなく、①の用法で解釋するいかなる障壁もないと判斷できる。従つて、本節では「史料F」の冒頭を、「突厥の民が成長するために、突厥の可汗が君臨するために、山東の城郭に、海のごとき河に到達したことはなかったそうです」と翻譯したのである。これまで②の用法で解釋した研究の多くは、「史料F」におけるトニユククの發言とその歸結について、ただ單純に突厥復興後の征服活動を想定するのみで、その歴史的背景を検討することがなかった。しかし拙譯によれば、「山東の城郭」や「海のごとき河」が所在する地域に可汗國を進出させ、支配せんという突厥側の意圖を読み取れるのであり、かかる記事の背景にこそ、漠南における第二可汗國の展開を読み解く關鍵があると見るべきであろう。

(二) 默啜可汗の「山東」攻撃

それでは「山東の城郭」や「海のごとき河」の同定作業に先立ち、「史料F」の記事が、默啜可汗治世の何時頃の事件に對應するかを明確にしておきたい。トニユクク碑文には明確な紀年表記がなく、他史料を參照して推測する必要があるが、本箇所に関しては、既に岑仲勉氏が「二十三(箇所)の城郭を(突厥軍が)破壊した」という文言から、聖暦元(六九八)年の事件を傳えたものと類推している「岑仲勉一九五八、八七〇頁」。

というのも、漢籍には、この聖暦元年に突厥の默啜可汗が漢地に侵攻を行ったという記事が多く残されているからであ

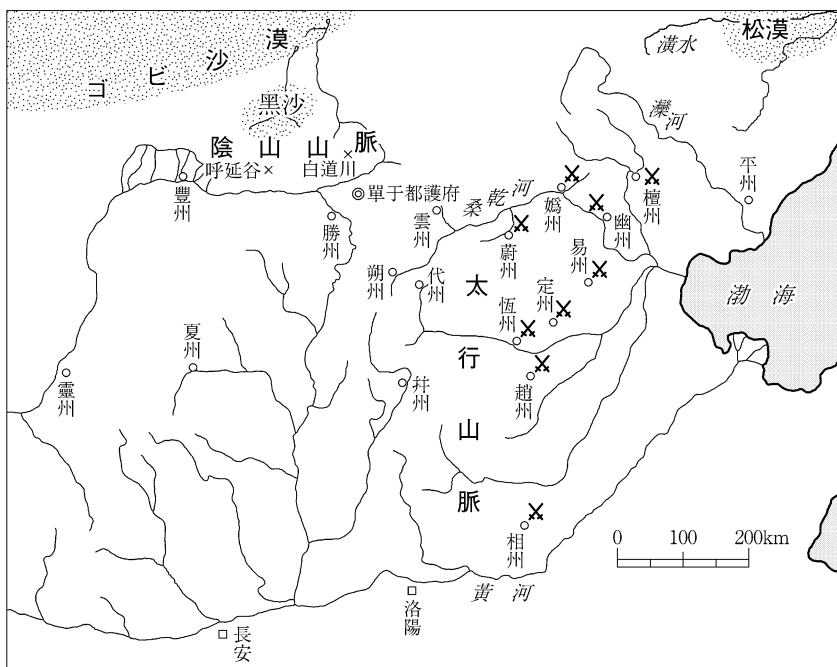


圖2 聖暦元年における突厥の侵攻

譚其驤（主編）『中國歷史地圖集 第五冊 隋・唐・五代十國時期』（上海、地圖出版社、1982年）に基づき作成した。

黒沙の所在範囲：本稿第一章の考察による。

✕＝被害に遭った州：正史などの典籍や岑仲勉『突厥集史』（北京、中華書局標點本、1985年）を参照した。

る。例えば、『舊唐書』卷六・則天皇后紀では、嬌州、檀州（八月）、趙州、定州（九月）が、『新唐書』卷四・則天皇后紀では、蔚州（八月）、相州（九月）が、『資治通鑑考異』卷一一、所引の唐統紀では、恆州、易州が襲撃を受けたとある。突厥軍は恐らく、嬌州や蔚州の侵掠を皮切りに東進し、唐の驛道沿いに南下して河北道の諸州を攻撃していったのであろう。ここに、太行山脈以東の地、すなわち「山東」地域において [Hirth 1899, pp. 16-18]、複数の「城郭を破壊した」という碑文の記述が裏附けられる。つまり [史料F] の記事を聖暦元年の記事に編年することは十分に支持されるのであり、第一章で引用した [史料D] も同年に繫年されていることから、[史料F] は默啜可汗が漠南の「黒沙南庭」に本

據地を置いていた時期の記事であったと確定できる。

このように突厥の侵攻範囲と年代が明らかになれば、當然のことながら、〔史料F〕において、聖暦元年以前は「到達したことはなかった」が、その後、トニユククラによって「到達せしめた」という *taluy ögüz* 「海のごとき河」が何を指し示すのが問題となろう。なんとなれば、*taluy* は「海」を、*ögüz* は「河」を意味する一般名詞であり [ED, pp. 119-120, 502]、直前の「山東の城郭」のように固有の地名要素を含んでいないため、従来、明確な解釋が施されてこなかったからである [cf. Rybatzki 1997, pp. 100-101, n. 263]。その理由のひとつとして、以下の碑文史料に伝えられた、毗伽可汗の即位宣言の一節の存在がある。

〔史料G〕⁽²⁴⁾ 闕特勤碑文・南面三行目

《前略》 *ilgärü : śantun : yazıqa tägi : sülädim : taluyqa : kičig : tägmädim : 《後略》*

東方に山東の平野にまで私（毗伽可汗）は遠征した。海には僅かに達しなかった。

へんには *śantun yazı* 「山東の平野」とあり、〔史料F〕の *śantun baliq* 「山東の城郭」に對應する地名が記されているが、*taluy* は何も冠していない。それ故、*taluy ögüz* は「*Taluy*（海の）河」とそのままの河川名として譯出されたり [ex. Radloff 1899, p. 10; Mauros 1951, p. 66; Aalto 1958, p. 36; Giraud 1961, p. 61]、あるいは「海、大海」という熟語として解釋されてきた [ex. Tekin 1968, p. 285; Rybatzki 1997, p. 100]⁽²⁵⁾。

その中で唯一具體的な河川名をあてたのがヒルト氏であり、元來、*taluy* という語は漢語「大澤」の借用語であると言う。つまり当該箇所の問題となっている *taluy ögüz* が「澤水」すなわち唐代の「桑乾河」を意味するとみなしたのである [Hirth 1899, pp. 18-19; cf. ED, p. 502; Tekin 1994, p. 66]。ただし、『舊唐書』卷九三・唐休璟傳には、「調露（六七九年）中、單于（都護府）の突厥背叛するに、奚・契丹を誘扇して州縣を侵掠せり。その後、奚・羯胡は又た桑乾の突厥と同じ（とも）反したり」とあり「中華書局標點本、二九七八頁」、羈縻支配を克服し獨立を成し遂げんとする突厥のなかには、桑乾河流域

で遊牧する集團もあったと見るべきである。従って、桑乾河は默噶可汗の治世に至るまで「到達したことはなかった」地域ではなく、ヒルト説は成立しない。

そこで、この古代トルコの地名を解釋するにあたり、十一世紀に成立したカーシユガリーのトルコ・アラブ辭書の記載を援用したい。辭書中、*irkin yaymur* という語は「何日も續く雨」と解釋され、そこに派生する解説のなかで *köl irkin* については「その智慧が満ちた湖のごとく集められたもの、という意味である」と述べられている。⁽²⁶⁾ つまり、これを應用すれば、*taluy ögüz* とは「(満ちた) 海のごとき(廣大な) 河」と譯出でき、そのような特定の河川を想定することができ。

とすれば、これまで議論してきた【史料F】と比較されるべきは、以下に引用する闕特勤碑文における默噶可汗時代の記述である。

【史料H】闕特勤碑文・東面十七行目⁽²⁷⁾〔毗伽可汗碑文・東面十五行目〕

《前略》*äcīm qayān : birlä : ilgärtü : yašıl ögüz : šantuj : yaziqa tägi : sülädimiz : 《後略》*

我が叔父たる可汗(默噶)とともに、東は綠河(と)山東の平野にまで我らは出兵した。

「山東の平野」に併記されている *yašıl ögüz* の *yašıl* は「綠、綠色の」を意味するが [cf. ED, p. 978]、トムセン氏がこの「綠河」を「黃河」と地理比定して以來、ほぼ通説となっている [Thomsen 1896, p. 149; cf. Tekin 1968, p. 399]。⁽²⁸⁾ 従って、

ともに默噶可汗の軍事行動を記述した【史料F】と【史料H】の内容は對應關係にあることが看取されよう。つまり【史料F】の「山東の城郭」は【史料H】の「山東の平野」に、同様に「海のごとき河」は「綠河」すなわち黃河に對應していたのである。そもそも本節で示したように、聖暦元年の突厥の侵攻は河北道の南端にあたる相州にまでに及んでおり、それを考慮するだけでも、トニユククが突厥軍を「到達せしめた」ところの「海のごとき河」として、【史料F】で黃河が想定されていたとしても何ら問題はない。

以上の議論を整理すると、「史料F」に記された「海のごとき河」とは黄河を指すものと考えられる。そして「山東」すなわち太行山脈以東の河北道を席卷していた默啜麾下の動向を勘案すれば、具體的には、渤海灣に注ぎ込む黄河の下流を意味していたと解釋できよう。このように、漠南の黑沙に開始された聖暦元年の軍事行動が、具體的な地名を記録しつつ彼らの碑文に刻まれたことは、それが第二可汗國にとって重要事件であったことの證左である。

第三章 突厥の黑沙領有とその意義

それでは第二章の検討結果を踏まえて、聖暦元年に勃發した突厥による山東攻撃に關連する史料を検討し、黑沙を領有した突厥に焦點をあててみたい。

〔史料一〕『唐會要』卷九四・北突厥「上海古籍出版社、二〇〇五頁」

その年（聖暦元年）の八月、太后は武承嗣の子延秀を以て突厥に入れ、その女を納めんとす。默啜は（闇）知微等に謂いて曰く、「我れは世よ李氏の恩を受くれば、女を以て李氏に嫁がせんと欲す。安ぞ武氏の兒を用いんや。聞くならく李氏は惟だ兩兒在るのみ、と。我れ兵を將いてこれを輔立せん」と。知微を以て南面可汗と爲し、兵を發して媯・澶等の州を冠して、書を移りて曰く、「我れ可汗の女をば、當に天子の兒に嫁がすべくも、武は小姓なれば、冒して婚を爲すこと罔し。我れはこれが爲に起兵し、河北を取らんと欲するのみ」と。九月、趙州を陷す。

〔史料二〕『舊唐書』卷一九四上・突厥上「中華書局標點本、五一六八―五一六九頁」

聖暦元（六九八）年、默啜は表もて則天と子と爲らんことを請い、并せて女有ると言い、和親を請う。初め、咸亨中（六七〇―六七三年）、突厥の諸部落の來りて降附せしものは、多くこれを豐・勝・靈・夏・朔・代等の六州に處らしめ、これを降戸と謂う。默啜はここに至りて又たこの降戸及び單于都護府の地を索め、兼ねて農器、種子を請う。則天初め許さざれば、默啜は大いに怨怒し、言辭は甚だ慢りたり。我が使人の司賓卿田歸道を拘えて、將にこれを害さ

んとす。時に朝廷はその兵勢を懼るれば、納言の姚璹、鸞臺侍郎の楊再思は建議して、その和親を許さんことを請う。遂に盡く六州の降戸數千帳を驅り、並びに種子四萬餘碩、農器三千事をば以てこれに與う。默啜の浸いよいよ強くなること、これに由るなり。

〔史料I〕によれば、則天武后との婚姻をめぐる外交交渉が決裂した結果、前節で検討した、默啜可汗の「山東」攻撃が引き起こされたという経緯がわかる。

そこで今一度、〔史料F〕の記述に立ち返ってみたい。そこには、「突厥の民が成長するために、突厥の可汗が君臨するために、山東の城郭に、海のごとき河に到達したことはなかったそうです」とあり、華北地域に向けて進出せんとする突厥側の意志が表明されていた。一方、漢籍〔史料I〕に記録された「河北を取らんと欲するのみ」という默啜の臺詞は、同時代における突厥可汗國の動向を推し測る上で非常に示唆的である。林俊雄氏は〔史料I〕と並行する『資治通鑑』卷二〇六の記事を引用して、默啜の言う「河北」を豊州や單于都護府のある黃河大屈曲部以北の地と見た〔林一九八五、一二三頁〕。しかし、前章で聖暦元年における突厥の侵攻範圍を確認したように、突厥軍は太行山脈以東、黃河以北の諸州を攻撃していた。また、聖暦元年の侵攻に對する中國側の對應として、『舊唐書』卷八九・狄仁傑傳には「聖暦初、突厥趙・定州等の州を侵掠すれば、（狄）仁傑に命じて河北道元帥と爲し、便宜を以て從事せしむ。……《中略》……時に河朔の人庶、突厥の逼脅せらるるところと爲れば、賊の退きし後誅を懼れ、又た多く逃匿す」とあるように〔中華書局標點本、二八九―二八九二頁〕、聖暦元年に焦點となった「河北」が河北道を意味することは明白である。従って、突厥碑文の記述と漢籍の記述に直接の繼受關係はないものの、兩史料ともに突厥可汗國の主たる關心が華北地域に向けられていたことを證言している。

このことは、當時の突厥が農牧接壤地帯の支配を指向していた事實からも看取できる。〔史料J〕に見られるように、默啜は「豊・勝・靈・夏・朔・代」の諸州に散居していた「降戸」と呼ばれる第一可汗國の遺民を自勢力に收容し、さら

に唐の羈縻支配の中心地であった單于都護府の領有も實現させていた。⁽³⁰⁾最終的に「種子四萬餘碩、農器三千事」を唐から受領したからには、突厥がこの時点で陰山以南からオルドスにいたる一帯を經營する體勢に移行していたと考えられる。また、漢人の閭閻知微を傀儡可汗に仕立てて利用していたとあるが、彼らのような集團の兵站線を維持するためにも、ある程度の定住據點を確保して人員を養う必要があったであろう。このように突厥が農牧接壤地帯の一角を占めていた點は、第一可汗國の啓民可汗以降三十餘年にわたり牙帳が漠南の定襄（朔州北界、現在の和林格爾周邊）に置かれていた史實と比肩される。しかるに默啜の治世には、陝西や山西の北部、さらには河北道にいたるまで影響力を及ぼしていたのであり、そのような突厥の軍事行動は聖曆元年だけにとどまらず、以後も數年にわたって繼續されていた。⁽³²⁾それを可能にした要因はいかなるものであろうか。

これに對する回答は、默啜が陰山山中から東方にも勢力を擴大していた點に求められよう。ひとつには契丹の李盡忠・孫萬榮による對唐反亂に對する介入結果があり、「契丹及び奚は、神功（六九七年）の後より、常にその徵役を受く」とあるように、⁽³³⁾默啜は契丹や奚といった遼河流域の諸族までを傘下に編入していた。「河内二〇〇三、一五一二七頁、菅沼二〇〇九、四一五頁」。また、聖曆元年、遼東方面に設置されていた安東都護府については、「聖曆元年六月三十日に至り、安東都護府を改めて安東都督府と爲し、右武衛大將軍の高徳武を以て都督と爲す。これより高麗の舊戸分散して多く突厥及び靺鞨に投ずれば、高氏の君長は遂に絶え、その地は並な諸蕃に没す」との記録がある。⁽³⁴⁾すなわち聖曆元年における突厥については、陰山山脈の黒沙から東方の遼河上流域の松漠にいたるまで、東西に廣がる草原地帯を勢力圏として確保していたという前提を見出すことができる。言い換えれば、黒沙を中心とした一帯の領有が保證されてこそ、華北における軍事行動の繼續が可能となっていたのである。

それ故、改めて考えてみるべきは、垂拱二（六八六）年末から同三（六八七）年の前半期に成し遂げられたと考證されている「岩佐一九三六、一三二頁」、初代可汗の骨咄祿によるモンゴル高原の征服事業である。從來、突厥による「故土の恢

復」あるいは「北遷」と評價されてきた出来事であるが〔岩佐一九三六、一三二頁、護一九六四、一八九―一九〇頁〕、筆者は前稿において、その歴史的意義は、漠南に集結して勃興した集團が新たに北方に向けて勢力を伸張させたことにあった、と新たに付け加えた〔鈴木二〇〇六、二五頁〕。そこで、これまでの行論中で明らかになった突厥の軍事行動に照らせば、モンゴル高原征服のもうひとつの意義は、陰山山中の據點である黒沙を確固たるものにするための軍事行動、すなわち背後防衛であったとも解釋できるはずである。

以上のように、突厥の漠南における軍事活動と農牧接壤地帯の經營は、陰山山脈の黒沙を領有して漠南に本據地を確保していたことに加え、漠北のモンゴリアを確保したことで初めて可能となったと言える。それは漠南に誕生して漠北に勢力を擴大し、漠南と漠北を併せて領有した第二可汗國のひとつの到達點であった。そこで想起されるのが、安史の亂に介入したウイグルを「早すぎた征服王朝」ととらえる森安氏の提言である。八世紀中葉、中央ユーラシアの遊牧騎兵軍團を中核とした安史の亂勢力とともにウイグル可汗國が「南方」の支配を試みたものの、いまだ安定した「システム」を確立する段階にはいたっていなかった、と見るものである〔森安二〇二一、一五八―二六三頁〕。そのように考えるならば、漠南の黒沙を領有しつつ農牧接壤地帯の經營を指向した復興後の突厥可汗國もまた、九世紀―十世紀において全ユーラシアで林立する「征服王朝」の系譜に連なるものとして位置付けられるであろう。⁽³⁵⁾ これまで突厥については、独自の文字の利用という現象に注目が集まっていたが、本稿が検討した七世紀末葉における黒沙の領有とその後の農牧接壤地帯の經營といった可汗國の展開にも中央ユーラシア遊牧民の質的變化を見出すことができるのである。

結 語

本稿は、先學の研究成果をもとに、陰山山脈に現存する考古遺跡の存在を新たに援用して、第二可汗國の本據地のひとつ「黒沙」^{カラサム}の地理比定を行った。そして、それを手掛かりに、突厥碑文の讀解を進め、漠南の黒沙に本據を構えた默啜

可汗による聖暦元年の軍事活動が突厥第二可汗國の到達點であつたと評價した。すなわち、七世紀末葉のユーラシア東部地域には、陰山山脈の黒沙を中心に、東は遼河流域・松漠の契丹や奚を従え、北は漠北・モンゴル高原の鐵勒諸族を併吞する強力な軍事力を有す政權が誕生し、農牧接壤地帯での活動を開始していたのである。

このような突厥可汗國の展開に鑑みれば、この遊牧政權が唐の羈縻支配領域内から誕生した點と、その復興後もなお陰山山脈の黒沙を手放さなかつた點は大變興味深い。黒沙は、漠南・漠北の遊牧民を「リザーヴ」する機能と同時に、彼らが陰山以南の農牧接壤地帯で行動する際には、漠北のモンゴル高原とともに、その後背地としての機能も備えていた。本稿が扱った時代、黒沙は北アジアあるいは中央ユーラシアと華北地域を繋ぐ架橋としての役割を果たし、それぞれの地に新たな影響力を及ぼすような勢力の搖籃の地となっていたのである。

また、以上のような地政學的要件を概観するならば、突厥の復興とその後の展開が東アジアに興えたインパクトは重要である。なんとすれば、黒沙の周邊、陰山山脈の山中には、拓跋國家の先魁となつた北魏によつて設置された六鎮のうち(36)の二つ——懷朔鎮と武川鎮——が所在しており、本稿で考察した突厥の軍事行動は、六鎮の亂が華北地域に興えた影響とも比較すべき事態と言ひ得る。なにより唐王朝の成立を南モンゴリアと華北で形成される地域の統一であつた、という提言「石見二〇一〇、一三頁」に即せば、かかる事態は唐そのものの存立を搖るがした、あるいはその根幹を變質させた契機として評價されることが許されるからである。

その意味で、六鎮の亂と同じく中原王朝の北邊防衛體制を崩壊せしめた安史の亂は、突厥第二可汗國の崩壊後十年ほどで勃發したのであり、當時のユーラシア東部地域の情勢が、突厥可汗國の復興以來、漠南の農牧接壤地帯に蓄積されてきた變化に胚胎していたことを看過できない。森部豐氏の研究によつて、幽州の安祿山麾下には突厥第二可汗國に由來する殘黨や、かつて突厥の被支配部族であつた奚・契丹など北アジア・東北アジア系の諸族が含まれていた事實が究明されている「森部二〇〇二、七五―七八頁、二〇〇八a、一一八―一九頁」。また、安史の亂後も第二可汗國の殘集を吸収した藩鎮

が河朔三鎮として独自の勢力を保持した點を考慮すれば「森部二〇〇八b」、突厥による「山東」つまり唐の河北道攻撃が、當地の歴史環境形成にいかにか大きな影響を与えたかを再評價せねばなるまい。あるいは、安史の亂を経験した唐が、舊突厥領であった黄河大屈曲部に軍糧漕運體制を整備していた點「丸橋二〇〇六」や、九世紀中葉のウイグル可汗國崩壊の際、唐の北邊軍鎮が非漢族の軍團を速やかに召集していた點「村井二〇〇八」は、農牧接壤地帯における突厥第二可汗國の活動に對する對應策（三受降城の設置や單于都護府の復置、オルドスで發生した六胡州の鎮壓など）などとも比較してゆく必要があろう。

以上のような課題を展望しつつ、實證研究上の課題を述べておく。本稿において、突厥第二可汗國の動向を聖曆元年に焦點をあてた結果、それが漠南の黑沙を樞軸にして展開していたことが浮かび上がった。とすれば、前後する時期における漠南での活動や農牧接壤地帯との關わりを追跡すること、さらには漠北・モンゴル高原との關わりを中央ユーラシア史の視點から有機的に連關させて説明すること、が究明すべき課題となる。そして、中央ユーラシアの遊牧民族史の立場から新たな知見を提供するため、突厥碑文の讀解を繼續すること、これらを筆者の責務としたい。

略號・文獻目錄（歐文・ABC順／中文・ピンイン順／邦文・五十音順）

引用の際には初出年代を表記したが、單行本に收録された論考は再録後の頁數を記す。

Aalto, P. 1958: "Materialien zu den alttürkischen Inschriften der Mongolei. Gesammelt von G. J. Ramstedt, J. G. Granö und Pentti Aalto," *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 60-7, pp. 1-91.

Atlas = W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition. (Annuaire desmonum. Trybka Oronckouï Eknedouïu.)*, 1. Lieferung 1892; 2. Lieferung 1893; 3. Lieferung 1896; 4. Lieferung 1899, St. Petersburg.

Bazin, L. 1982: "Note de toponymie turque ancienne," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 36-1/3, pp. 57-60.

- Berta, Á. 2004 : *Szavaimat jól halljátok... A türk és ujugur rovásírásos emlékek kritikai kiadása*. Szeged.
- CTD = R. Dankoff & J. Kelly, *Mahmud al-Kāṣṣārī, Compendium of the Turkic Dialects (Dirāḡ al-Luḡat al-Turk)*. 3 vols., Harvard University Printing Office, 1982, 1984, 1985.
- Czegeľdy, K. 1962 : "Çöyay-quzi, Qara-qum, Kök-öng," *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 15-1/3, pp. 55-69.
- De La Vaissière, É. 2002 : *Histoire des marchands sogdiens*. (Bibliothèque de l'institut des hautes études chinoises 32), Collège de France, Institut des hautes études chinoises, Paris.
- Di Cosmo, N. 1999 : "State Formation and Periodization in Inner Asian History," *Journal of World History* 10-1, pp. 1-40.
- ED = G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.
- Erdal, M. 2004 : *A Grammar of Old Turkic*. (Handbook of Oriental studies VIII-3), Leiden /Boston.
- Gabain, A. von 1949 : "Sterne und Stadt im Leben der ältesten Türken," *Der Islam* 29-1, pp. 30-62.
- 1974 : *Altürkische Grammatik*. 3. Auflage, Wiesbaden. (1. Auflage, Leipzig 1941)
- Giraud, R. 1961 : *L'inscription de Bain Tsoklo*. Paris.
- Hamilton, J. 1962 : "Тогуз-Огуз et Он-Ууур," *Journal Asiatique* 250-1, pp. 23-63.
- Heikel, A. O. 1892 : (ed.), *Inscriptions de l'Orkhon, recueillies par l'expédition finnoise 1890 et publiées par la Société finno-ougrienne*. Helsingfors.
- Hirth, F. 1899 : "Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk," *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge. St. Petersburg.
- Ilse Laude-Cittautas 1961 : *Der Gebrauch der Farbzeichnungen in den Türkdiaketen*. Wiesbaden.
- Lattimore, O., 1932 : *Manchuria: Cradle of Conflict*. New York.
- Магов, С. Е. 1951 : *Памятники древнетюркской письменности. Тексты и исследования*. Москва/Ленинград.
- Orkhon = D. Vasil'yev et al. (eds.), *Orkhon. The Atlas of Historical Works in Mongolia*. (Orkhon. Mögölistan Tarihi Eserleri Atlası),

Ankara, 1995.

Orkun, H. N. 1936: *Eski Türk Yazıtları*, I, İstanbul.

Radloff, W. 1899: 'Die Inschrift des Tonjukuk', *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge. St. Petersburg.

Rybatzki, V. 1997: *Die Tonjukuk-Inschrift*. (Studia uralo-altaica 40), Szeged.

Tekin, T. 1968: *A Grammar of Orkhon Turkic*. Bloomington /The Hague.

——— 1994, *Tunjukuk Yazıtı*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 5), Ankara.

——— 2000, *Orkhon Türkçesi Grameri*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 9), Ankara.

Thomsen, V. 1896: *Inscriptions de l'Orkhon déchiffrées*. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 5), Helsingfors.

——— 1924: (Trans. by H. H. Schaeder), "Altürkische Inschriften aus der Mongolei," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 78 (Neue Folge 3-2), pp. 121-175.

Тугушева, Л. Ю. 2008: *Тюркские рыночные письменные памятники из Монголии*, Москва.

岑 仲勉 一九五八 『突厥集史』上・下、北京、中華書局。

蓋 山林 一九九一 「內蒙古百靈廟一帶突厥遺迹初探」『東北亞歷史與文化：慶祝孫進己先生六十誕辰文集』瀋陽、遼瀋書社「再

錄：『蓋山林文集』哈爾濱、黑龍江教育出版社、一九九五年、七二五—七六一頁。

——— 一九九六 「絲綢之路草原民族文化」（絲綢之路研究叢書 八）烏魯木齊、新疆人民出版社。

任 美鏐 一九八六 「中國的自然地理」阿部治平・駒井正一（譯）東京、東京大學出版會。「原著：『中國自然地理綱要』北京、商

務印書館出版、一九八二年」

芮 傳明 一九九八 『古突厥碑銘研究』上海、上海古籍出版社。

史 念海 一九八一 a 「黃土高原及其農林牧分布地區的變遷」『歷史地理』創刊號「再錄：『河山集』三集、北京、人民出版社、一

九八八年、五五—八八頁。

- 一九八一 b 「兩千三百年來額爾多斯高原和河套平原農林牧地區的分布及其變遷」『紀年陳垣誕辰百周年史學論文集』
 「再録」『河山集』三集、北京、人民出版社、一九八八年、八二—一〇七頁」
- 史念海・曹爾琴・朱士光 一九八五 「黃土高原森林與草原的變遷」西安、陝西人民出版社。
- 王博・祁小山 一九九五 「絲綢之路研究叢書 七」烏魯木齊、新疆人民出版社。
- 嚴耕望 一九八五 「唐代交通圖考（一）」（中央研究院歷史語言研究所專刊 八三）臺北、中央研究院歷史語言研究所。
- 朱振宏 二〇一〇 「突厥第二可汗國建國考」『第二屆漢化・胡化・洋化・傳統社會的轉型與適應國際學術研討會會議論文集（上册）』臺灣、國立中正大學歷史學系、一九九—二二三頁。
- 岩佐精一郎 一九三六 「突厥の復興に就いて」和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京、七七—一六七頁。
- 石見清裕 一九八四 「突厥の楊正道擁立と第一帝國の解體」『早稻田大學大學院文學研究科紀要』別冊一〇「増補・再録・石見一九九八、八五—一〇八頁」。
- 一九八六 「唐の突厥遺民に對する措置」『論集 中國社會・制度・文化史の諸問題』（日野開三郎博士頌壽記念論集）福岡、中國書店「改題・再録・石見一九九八、一〇九—一四七頁」。
- 一九九二 「單于都護府と土城子遺跡」『中國の都市と農村』東京、汲古書院、三九—一四二四頁。
- 一九九八 「唐の北方問題と國際秩序」東京、汲古書院。
- 一九九九 「ラティモアの邊境論と漢・唐間の中國北邊」『東アジア史における國家と地域』東京、汲古書院、二七八—二九九頁。
- 二〇一〇 「唐の成立と内陸アジア」『歷史評論』七二〇、四—一六頁。
- 小野川秀美 一九四三 「突厥碑文譯註」『滿蒙史論叢』四、二四九—四二五頁。
- 片山章雄 一九九九 「タリクト碑文」森安孝夫・A. オチル（編）『モンゴル國現存遺蹟・碑文調查研究報告』豐中、中央ユーラシア學研究會、一六八—一七六頁。

- 河内春人 二〇〇三
 齊藤茂雄 二〇〇九
 佐川英治 二〇〇七
 白鳥庫吉 一九一二
 菅沼愛語 二〇〇九
 鈴木宏節 二〇〇五
 妹尾達彦 一九九九
 林 俊雄 一九八五
 一九九六
 二〇〇六
 二〇〇八
 二〇〇一
 一九八五
 一九九六
 二〇〇二
 二〇〇五
- 『渤海と契丹・奚』佐藤信（編）『日本と渤海の古代史』東京、山川出版社、二二―四五頁。
 『唐代單于都護府考』その所在地と成立背景について——『東方學』一一八、一二―三九頁。
 『遊牧と農耕の間』北魏平城の鹿苑の機能とその變遷——『岡山大學文學部紀要』四七、一三七―一六四頁。
 『東胡民族考』『史學雜誌』二二―三『再録』、『白鳥庫吉全集 四 塞外民族史研究上』東京、岩波書店、一九七〇年、六三―三二〇頁。
 『唐代の契丹と突厥第二可汗國』『京都女子大學大學院文學研究科研究紀要（史學編）』八、一二―二六頁。
 『突厥阿史那思摩系譜考』突厥第一可汗國の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集團——『東洋學報』八七一、三七―六八頁。
 『三十姓突厥の出現』突厥第二可汗國をめぐる北アジア情勢——『史學雜誌』一一五―一〇、一二―三六頁。
 『突厥トニユクク碑文簡記』斥候か逃亡者か——『待兼山論叢（史學篇）』四二、五五―八〇頁。
 『中華の分裂と再生』『岩波講座 世界歴史 九 中華の分裂と再生』東京、岩波書店、三―八二頁。
 『長安の都市計畫』（講談社選書メチエ 二二三）東京、講談社。
 『掠奪・農耕・交易から見た遊牧國家の發展』突厥の場合——『東洋史研究』四四―一、一一〇―一三六頁。
 『草原世界の展開』中世の中央ユーラシア——藤川繁彦（編）『中央ユーラシアの考古學』（世界の考古學 ⑥）東京、同成社、二六三―三三九頁。
 『遊牧民族の王權』突厥・ウイグルを例に——『岩波講座 天皇と王權を考える 第三卷 生産と流通』東京、岩波書店、一一五―一三九頁。
 『ユーラシアの石人』（ユーラシア考古學選書）東京、雄山閣。

- 日野開三郎 一九五八
 「突厥默啜可汗の興亡と小高句麗國」『史淵』七五『日野開三郎 東洋史學論集 第八卷 小高句麗國の研究』東京、三一書房、一九八四年、一三一―一五八頁。
- 平田陽一郎 二〇〇四
 「突厥他鉢可汗の即位と高紹義亡命政權」『東洋學報』八六―二、一―三四頁。
- 古畑 徹 一九八六
 「唐渤海の展開と國際情勢」『集刊東洋學』五五、一六―三四頁。
- 丸橋充拓 二〇〇六
 「唐代北邊財政の研究」(岩波アカデミック叢書) 東京、岩波書店。
- 村井恭子 二〇〇八
 「九世紀ウイグル可汗國崩壊時期における唐の北邊政策」『東洋學報』九〇―一、三三―六七頁。
- 森安孝夫 二〇〇二
 「ウイグルから見た安史の亂」『內陸アジア言語の研究』一七、一一七―一七〇頁。
- 二〇〇七
 『シルクロードと唐帝國』東京、講談社。
- 森安孝夫・鈴木宏節・齊藤茂雄・田村 健・白 玉冬 二〇〇九
 「シネウス碑文譯注」『內陸アジア言語の研究』二四、一―九二頁。
- 森部 豐 二〇〇二
 「安史の亂前の河北における北アジア・東北アジア系諸族の分布と安史軍の淵源」『唐代史研究』五「改題・再録」森部二〇一〇、五九―八七頁。
- 二〇〇八 a
 「七―八世紀の北アジア世界と安史の亂」森安孝夫(編)『シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相』平成一七―二〇年度科學研究費補助金研究成果報告書(近刊)「森部二〇一〇、八九―一二二頁」。
- 二〇〇八 b
 「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動靜」『東西學術研究所紀要』四一「増補・改題・再録」森部二〇一〇、一二三―一八一頁。
- 二〇一〇
 『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』吹田、關西大學出版部。
- 護 雅夫 一九六四
 「突厥と隋唐兩王朝」『古代史講座 一〇 世界帝國の諸問題』東京、學生社「増補・改題・再録」『古代トルコ民族史研究Ⅰ』東京、山川出版社、一九六七年、一六一―二三三頁。
- 一九七六
 「突厥第二可汗國における「ナシヨナリズム」」『東洋史研究』三四―四「改題・再録」『古代トルコ民族史研

究Ⅱ』東京、山川出版社、一九九二年、九八一―一二三頁。

山田信夫 一九五一 「テュルクの聖地ウトゥケン山」『静岡大學文理學部研究報告・人文科學』一「再録」『北アジア遊牧民族史研究』

究』東京、東京大學出版會、一九八九年、五九―七一頁。

山下將司 二〇〇五 「隋・唐初の河西ソグド人軍團——天理圖書館藏『文館詞林』「安修仁墓碑銘」殘卷をめぐる——」『東方學』一一〇、六五―七八頁。

學』一一〇、六五―七八頁。

二〇〇八 「唐の監牧制と中國在住ソグド人の牧馬」『東洋史研究』六六―四、一―三二頁。

吉田順一 一九八〇 「ハンガイと陰山」『史觀』一〇二、四八一―六一頁。

【附記】

本稿の論旨は、平成二十二年六月四日に第二屆漢化・胡化・洋化・傳統社會的轉型與適應國際學術研討會（臺灣・國立中正大學）において行つた口頭報告「突厥と唐の農牧接壤地帯——陰山黑沙考——」の内容を増補修正したものである。なお、本稿は、平成二十二年度文部科學省科學研究費補助金（特別研究員奨励費）、ならびに優秀若手研究者海外派遣事業（特別研究員）「突厥碑文讀解によるモンゴル・中國華北地域における古代トルコ系遊牧民の歴史學的研究」による研究成果の一部である。

註

(1) 本稿では突厥に言及する場合、特に斷らない限り、アルタイ山脈以東を領有していた、いわゆる東突厥を指す。この東突厥については、五五二年から六三〇年まで存続した王統を突厥第一可汗國と呼び、唐による羈縻支配の後、六八二年から七四四年までを突厥第二可汗國と呼び慣わしている。

(2) 唐による羈縻支配の概観は、『岩佐一九三六、石見一九八六』を参照されたい。

(3) 單于都護府は突厥第二可汗國の復興後一時陷落し、その後七二〇年に移設、復置されたのであり、現在の内蒙古自治區の和林格爾土城子に地理比定されている單于都護府は後置されたものと考えられている『嚴耕望一九八五、三二九頁、石見一九九二、四〇六―四〇八頁』。なお、この土城子遺跡から出土した「劉如元墓誌」の讀解によって、當地が復置單于都護府の所在地であつたことが檢證されている『齊藤二〇〇九、二九―三〇頁』。

- (4) 先行する妹尾氏の議論「妹尾一九九九、八一―二頁・一四一―一六頁」も参照のこと。なお、当該地域における農耕地や牧草地の範囲は決して固定されたものではなく、歴史上に常に動態的なものであったことは、妹尾氏が指摘した通りである「妹尾二〇〇一、七九―一八四頁」。これに關しては、中國の史念海氏らによる關中平野・黃土高原における農地開拓や山林・牧草地の遷移などといった環境史の議論が重要な核をなしている「*ex. 史・曹・朱一九八五、史念海一九八一 a & b*」。
- (5) 海外でも臺灣の隋唐史家である朱振宏氏が、上述したラティモア氏の研究や、近年の中國における研究を總括して、当該地域を「長城沿線」と呼稱する「朱振宏二〇一〇、一八五―一八六頁」。突厥第二可汗國の滅亡後、農耕と遊牧が混淆する當地に、古代トルコ系遊牧民やソグド人、吐谷渾や稽古などといった諸族が流入していた點を強調する朱氏の視點は「朱振宏二〇一〇、一八七―一九〇頁」、隋唐代の東アジア地域に突厥人とソグド人の密接な連携を見出すドウ・ラ・ヴェシエール氏や森部氏、山下氏の實證研究「*De la Vaisier 2002; 森部二〇〇一、二〇〇八 a & b、山下二〇〇五・二〇〇八*」と軌を一にするものである。
- (6) 代表的な研究に「岩佐一九三六」があるが、そこで利用された突厥碑文のテキストは現段階で再検討を要するものである。なお、拙稿「鈴木二〇〇五」は、羈縻支配時代の漠南で活動した突厥遺民集團にも言及したが、出土漢文墓誌から第一可汗國の系譜を再構成することが主目的であった。
- (7) 突厥碑文では *Ötügen yis*「オテケケン山」と、漢籍では於都斤山、烏特韃山、鬱督軍山などと知られており、古代トルコ系遊牧民の聖地として尊崇を集めてきた場所である「*Gabain 1949, p. 36; 山田一九五一、六二―六五頁*」。考古學的な觀點から、モンゴル高原の中央に位置するハンガイ山脈やその北方のオルホン・セレンゲ河流域、東方のトーラ河流域を含む一帯であったと地理比定されている「*林二〇〇二、一二六頁*」。
- (8) 突厥碑文のテキストはローマ字による再建形のみを提示した。突厥文字からの再建形式は「森安他二〇〇九、七頁」の對照表に準據する。テキストでは、斜體を利用して殘畫が見える文字の再建を示し、下線で翻字に表記されない母音類を、…で殘畫が見えるが判讀できない文字（文字數は計測により推定）を示す。拙譯中の（ ）は意味を補った部分である。なお、本稿におけるトニクク碑文のテキストは原則的に一九九八年にモンゴル國から大阪大學に將來された拓本に依據して作成したものである。
- (9) 引用箇所については「鈴木二〇〇八、五八―六四・七一―七三頁」も参照されたい。
- (10) 古代トルコ語では *čoyan* と *čuyay* とも再建できるが、本稿では前者の *čoyan* に統一した。この *čoyan* については後述するが、關連する問題點は、拙稿「鈴木二〇〇八、七五頁、註九・一〇」も参照されたい。
- (11) 当該箇所テキストと翻譯、譯注については「森安他

二〇〇九、一〇・二四・三四・四九一五〇頁」を参照。再建形テキストと翻譯における〳〵は、碑面が完全に破損して判讀不可能な部分を示す。なお、同じくウイグル可汗國第二代可汗の紀功碑であるタリャト碑文・東面七行目にも、引用箇所と並行する記述があるが、カラクムが記されていたであろう箇所は碑面の缺損により判讀できない【片山一九九九、一六九・一二三頁】。

- (12) バザンによって、キヨゲル、キヨミル、タールゲ（炭山）、ヤール河が内蒙古地域に存在すると考察されているが【Basin 1982】、具體的な地理比定は今後の課題である。

- (13) 古代トルコ語の *yul* が「山岳森林、山脈」を指すことに依る【cf. ED, 976; 岩佐一九三六、一一六頁】。一方の *quz* は「山の北側」を意味する【cf. ED, 680】。

- (14) 以下を参照した。Thorp, J., *Geography of the soils of China*, Nanking: The National Geological Survey of China, 1936; 中國科學院南京土壤研究所（編）『中國土壤』北京、科學出版社、一九七八年、中國地質圖集編輯委員會（編）『中國地質圖集（電子版）』北京、地質出版社、一九九六年。

- (15) 內蒙古自治區地圖制印院（編）『內蒙古自治區地圖集』【北京、中國地圖出版社、二〇〇七年、五三頁】によれば、陰山山脈を構成する大青山と陽山の山間盆地に「前黑沙」、「後黑沙」などという地名が現存する。土壤の特徴に由来するのだろう。

- (16) 林俊雄氏は突厥の東方領域での石人の作成が七世紀中頃

から開始されたという假説を提案するとともに、突厥の葬制と唐の昭陵・乾陵との影響關係を示唆している【林二〇〇五、九九一―一〇二頁】。唐の領域により近い内蒙古における石人は他にも知られるところであり【王博・祁小山一九九五、一五一―一五二頁・卷末圖版一三―一六、蓋山林一九九六、二〇四―二二八頁】、関連遺跡の年代觀を追求するための後考が俟たれる。

- (17) 筆者は、二〇一〇年八月二十日から二十二日にかけて達茂旗周辺の岩畫や石圍い墓のいくつかを實見することができたが、蓋山林氏の研究報告【蓋山林一九九二】を再検討すべきことを實感した。特に遺跡の所在地と現存狀況を整理して提示することが、今後の研究の基盤となろう。なお、この現地調査は、中國蒙古史研究協會の孟克德力格爾先生、內蒙古大學の包文勝先生の御厚意によって可能になったものである。ここに記して、深く謝意を申し上げたい。

- (18) 最近、上述した(A)の遺跡が所在する查干敖包蘇木の周邊で突厥文字銘文が発見された。その寫眞は、孟克德力格爾（編）『達爾罕茂明安聯合旗歷史文化遺跡』【呼和浩特、內蒙古人民出版社、二〇一〇年】の四一頁に掲載されているが、文字の判讀は困難で、銘文の全文や刻文内容、成書年代などを具體的に特定することは現時點では不可能である。ただし少なくとも突厥文字の利用がはじまった八世紀前半から、ウイグル可汗國が存立していた九世紀中葉にかけて成立したと見てよい。今後の調査が俟たれる。

- (19) 碑石や拓本の状態が悪く、初期の研究では *olun-yul* と推

定復元されていた [Radloff 1899, p. 11; Maron 1951, p. 59, 62; Giraud 1961, p. 88, 小野川一九四三「三三〇頁」]。しかし、テキン氏が *qilimyalı* と復元して以後 [Tekin 1968, p. 250]、この再建が定説となっている。この読みは大阪大学所蔵拓本などでも確認することができたため、テキン説を支持したい。

- (20) ラドロフ氏の復元である *şantun balıq* が通説となっている [Radloff 1899, pp. 10-11, 48; Orkun 1936, pp. 106-107; Maron 1951, pp. 58, 62, 66; Giraud 1961, pp. 25, 88; Tekin 1968, p. 250; Tekin 1994, pp. 8-9; Rybatzki 1997, pp. 32, 52; Berta 2004, pp. 35, 55; Tyrywera 2008, p. 73; 小野川一九四三「三三〇頁」]。一方でトムセン氏が譯出し [Thomsen 1924, p. 165; cf. ED, pp. 958, 984]、アールト氏が翻字、再建するように [Aalto 1958, pp. 36-37]、*şantun yazıq* と読む見解もある。大阪大学所蔵拓本でも判讀できなかったため、著者は二〇一〇年三月にロシア・サンクトペテルブルクの科学アカデミー東洋寫本研究所周蔵拓本で確認したが、その諸本の残畫からも確たる復元はできなかった。直前の十八行目で述べられた内容が繰り返されていているものと判断して、本稿はラドロフ氏の推定復元を採用した。

- (21) Orkun 1936, p. 106; Giraud 1961, pp. 61, 88; Tekin 1994, pp. 8-9; Rybatzki 1997, p. 101; Tyrywera 2008, p. 80; 芮傳明一九九八、二七九頁。

- (22) 以下に掲げる用例のうち、ビルゲ可汗碑文のテキストに

ついては、フィンランド調査隊の碑文寫真と翻字テキスト [Heikel 1892, pp. 13-14, Tab. 20-28]、ならびにラドロフ氏が公刊した拓本寫真 [Atlas, Tafel XXII (X) & XXIII (X); cf. Orkhon, pp. 28-31] を参照した。なお、引用は文脈を検討できる最低限にとどめ、各用例に前後するテキストは割愛した。

- (1) トニユクク碑文・十三行目 [第一碑文・南面六行目]

yuyqa ārkli: tupu'yali uñuz ārmış: yinçgä ārkliq:
üzgäli: uñuz

薄うちは、突き刺しやすい (突き刺すために容易である) という。細いうちは、折りやすい (折るために容易である)。

- (2) トニユクク碑文・二十七行目 [第一碑文・北面三行目]

ol suv qodli: bardimiz: aşanyali: tüşürtimiz

その河を我々は下って行った。腹ごしらえするために、我々は下馬させた。

- (3) ビルゲ可汗碑文・東面二十八行目

oqı'yali: kälti: beş balıq: anı ücün: ozdı

大聲で呼びに來た (呼ぶために來た)。北庭はそれのために (陥落を) 免れた。

- (4) ビルゲ可汗碑文・東面三十二行目

yaday: yabız: bolrı: tep: al'yali: kälti: sıgar susı:
evig barqı'y: yul'yali: bardı: sıgar: süsi: süñşgäli:

kālī

「(敵の)歩兵が悪い状態になった」と言って、(我が軍は)略奪するためにやって来た。(我が)一軍は家財を奪うために(出て)行った。別の一軍は(敵と)戦うためにやって来た。

- (23) Radloff 1899, pp. 10-11; Thomsen 1924, p. 165; 小野川一九四三・三二〇頁。ただし近年の譯註研究では唯一ベルタ氏のみが目的用法で譯出している [Berta 2004, p. 79]。
- (24) 本碑文のテキストは京都大學所藏の拓本を底本とし、廣島大學・東洋文庫所藏拓本などで校勘した。フィンランド調査隊の碑文寫眞 [Heikel 1892, Tab. 9-10] とランドロフ氏の拓本寫眞 [Atlas, Tafel XIX-1 (Ka) & XX-1 (Ka); Orkhon, pp. 24-25] は補足的に参照している。

- (25) 芮傳明氏は「大洋」と解釋して、渤海灣を含蓄するとう可能性を提示するが「芮傳明一九九八、三九一四〇頁」、**【史料F】**では最終的にそこに「到達せしめた」のであり、「海には僅かに達しなかった」とする**【史料G】**の記述とは矛盾する。そもそも**【史料G】**は毗伽可汗時代に出された聲明であるが、第二可汗國の國威を誇うものであるから、前代の默啞時代に「到達せしめた」のであれば當然、海に達していたと記すはずである。

- (26) カシユガリーの記載とその翻譯文については、[CTD I, p. 137]を参照した。なお、これについては、^{ケルチン}關特勤 Kol Tegin/Tiginなどの稱號、人名の解明に際してハミルトン氏が援用したことがある [Hamilton 1962, p. 52, n.

10]。

- (27) テキストの底本は**【史料G】**に準じた。併せて参照した碑文・拓本寫眞は、以下の通り。Heikel 1892, Tab. 2, 5-8; Atlas, Tafel XVII (K) & XVIII (K); Orkhon, pp. 18-23。

- (28) ただし、この黄河説には異論もあり、白鳥庫吉氏は yasŋ ōgüz を「灤河」に比定している [白鳥一九二二・二〇七二一〇頁、小野川一九四三・二九四・三五六(註六八)]。黄河が綠色(あるいは碧色)に見えたはずがないという疑念に端を發する議論であったが、古代トルコ語の用例を集積したラウデ・ツイルタウタス氏の考察が如き [Ilse Laude-Cirantaus 1961, pp. 59-64]、古代トルコ語の色彩表現の幅を考慮していない。また、芮氏は内蒙古東部を流れる、遼河水系に屬する西拉木倫河(唐代の潢水)に比定するが「芮傳明一九九八、四三二四五頁」、次節で紹介するように、聖曆元年を迎える以前、既に突厥が契丹を攻撃していた史實に鑑みれば、西拉木倫河もまた**【史料F】**で「到達したことはなかった」と言われる立地の河川ではない。本稿が兩説を却ける所以である。

- (29) 前後する突厥(默啞可汗)・唐(周)間の關係については、「護一九六四、一八八一九九頁」で概観できる。

- (30) 『唐會要』卷七三・單于都護府にあるように、聖曆元年に單于都護府が安北都護府に改められて以降、單于府が機能していなかったことに對應する「嚴耕望一九八五、三二一九頁、石見一九九二、四〇五一四〇六頁」。突厥と農耕の關わりについては「林一九八五」に詳しい。

- (31) 岩佐一九三六、八五頁、林一九八五、一二一頁。定義は隋の文帝が啓民可汗の居地として義城公主を嫁がせた場所でもあり、その重要性については、「石見一九八四、九三―九四頁、平田二〇〇四、五頁」などを参照。
- (32) 突厥の南寇が抑制されたのは景龍二(七〇八)年の三受降城設置以降である「[2]護一九六四、一九四―一九五頁」。
- (33) 『通典』卷一九八・邊防一四・突厥中「中華書局標點本、五四三八頁」。
- (34) 『唐會要』卷七三・安東都護府「上海古籍出版標點本、一五六二頁」。默啜可汗時代の東方との關係史については、「日野一九五八、古畑一九八六」などに詳しい。
- (35) 草原遊牧民の史的發展とその時代區分を試みたデイッコスモ氏は、突厥・ウイグルを交易・貢納帝國時代に、契丹(遼)を農牧の二重統治帝國時代に位置附ける [D] Cosmo 1999, pp. 30-34。しかし、本稿で示した七世紀末葉における突厥可汗國の展開に鑑みても、草原遊牧國家において農耕地支配の萌芽が確認できるのであり、少なくとも突厥・ウイグルについては過渡期にあつたとみなすべきであろう。
- (36) 懷朔鎮は、包頭市の北約六十キロメートル、固陽縣内にその遺址が認定されている。一方、武川鎮については、現在の武川縣の西南約二十キロメートルにある大青山郷の土城梁古城址とする見解が通説になっているが、異論もある [佐川二〇〇七、一三八頁、註七四]。なお、黒沙比定の中心地とした百靈廟鎮の北約二三キロメートル、艾不蓋河の流域にはモンゴル時代のオングト王家の首府遺址であるオロンスム遺跡が現存する。トルコ・モンゴル系遊牧民の定住據點という視点からも、陰山山脈は今後も検討對象となろう。

in terms of the legal system, and the collective responsibility of those in a shared residence is highly suggestive. The collective responsibility of a shared residence, in other words, of those registered in the same Hu can be deemed collective responsibility based on spatial proximity rather than on shared blood. In this case, Hu can probably be best understood as subsumed under the unit of five and as the smallest unit of a spatial character. Regarding Hu as identical with the family ignores this aspect and must be termed scholastically dangerous.

THE REVIVAL AND DEVELOPMENT OF THE TÜRK QAYANATE IN THE GOBI DESERT DURING THE TANG DYNASTY

SUZUKI Kôsetsu

While employing the results of previous research, this article relies on the results from archaeological sites in the Yinshan Mountains range to make a geographical determination of Qara qum (Ch. *Heisha* 黑沙), one of the strongholds of the Second Türk Qayanate. As a result, I was able to conclude that Qara qum, the cradle of the Second Qayanate, was located within a 50 kilometer radius of the town of Bailingliao 百靈廟 in the upper basin of the Aybugha-in-gol (the Aybugha River) 艾不蓋河 that flows through Darhan Muminggan United Banner 達爾罕茂明安聯合旗 in the Inner Mongolia Autonomous Region. Next, on the basis of this conclusion and a re-reading of mid-8th century Old Turkic Inscriptions (the Inscription of Toñuq), I was able to confirm on the basis of the account therein the fact that Qapγan Qayan (Ch. *Mochuo* 默啜), whose stronghold was in the Taihang Mountains east of Qara qum, invaded Hebei province 河北道 of the Tang dynasty in 698 (The 1st year of Shengli 聖曆). And then, I elucidated the fact that Türk Qayanate in the Gobi desert ruled the mixed nomadic and agricultural area of the northern borders of the Tang Empire and had moved to the stage of its implementation.

Based on a critical reading of these sources, it can be said that a state was formed in Northern Asia, centered on the Yinshan Mountains range, and it was created by horse-riding nomads equipped with powerful military force who subjugated the Khitan (or Kidan) and Xi peoples of the Liao river basin to the east, and swallowed up the various Oyuz Tribes to the north on the Mongol steppe north of

the Gobi Desert from the close of the 7th century to the beginnings of the 8th. It is thought, moreover, that the military activity and rule of the mixed nomadic and agricultural area of the Türks of the time was first made possible by securing the Mongol steppe north of the Gobi Desert in addition to securing the stronghold of Qara qum in the Yinshan Mountains. The historical significance of the revival of the Türks of this mixed area lies in the fact that they expanded their power beyond the Gobi Desert into the steppes of Central Eurasia and were further able to expand their territory in Eastern and Northern Asia. Then, if one considers Chinese and East Asian history thereafter, one realizes that the revival and development of the Türk Qayanate was without doubt directly connected to the rebellion of An Lushan that destroyed the Tang system of defense on its northern borders.

THE DIPLOMATIC RELATIONS OF SIAM WITH FRANCE AND QING CHINA IN THE MID-1880S

KOIZUMI Junko

This study examines the question of how Siam viewed, maintained, and attempted to alter and further develop relations with both France and Siam's neighboring countries in Asia, in particular China, as revealed through Thai archival records. The mid-1880s and onward is generally regarded as a period of increasing colonial threat for Siam as France and Britain gradually colonized Siam's neighboring countries, such as Burma and Vietnam. But it was also the period in which Siam had to face renewed demands for tribute from Qing China.

Amidst the worsening confrontation between China and France over Vietnam, France secretly proposed that Siam dispatch 500 troops to support France in its expected war against China on the ground that in the event of French victory, Siam would be able to end its tributary relations with Qing China, Siam would then be recognized as a fully independent country, and Siam's relationship with France would become even closer. Suspecting the possible collaboration between Siam and France, Qing China also dispatched Zheng Guanying, who sounded Siam's true intention and suggested a possibility of cooperation between Siam and China.

In response, Siam declined the proposal from France; and Siam did not react